

新選組のふるさと

新選組を語る会事務局長 峯岸 弘行（公員）



ガドリング砲を操作する峯岸弘行さん



河井継之助記念館
友の会会報

第9号

2011.03

編集・発行
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526

頒布価:50円(送料別)

「誠の旗のもと、京の町でお前たちは、時代と戦ったのだ。何が正しくて何が間違っていたかなんてことは、百年後、二百年後のものたちが決めればいい」これは大河ドラマ「新選組」で土方歳三の首目の兄・土方為次郎（栗塚旭）のセリフです。幕末というカオスの中で、ふるさとのため、おのれの信ずるもののために、不惜身命で闘い、散つて逝つた多くの人々。河井継之助もその一人だと思いが、それは新選組の元隊士たちも

同様です。日野市は「新選組のふるさと」と呼ばれ、幕末期に土方歳三、井上源三郎など、多くの新選組の隊士を輩出しました。しかし残念ながら、この日野市において、30年位前までは、新選組に興味を持つ方はごく限られており、「村の長（おさ）」的存在である高齢の名士の方の中には、新選組について語ることを拒否されるような雰囲気さえ



新選組パレードにて

あつたのです。戦に負けた側だからでしょうか。そういうこともあり、私が新選組についての詳細を知つたのは、18歳の時に大好きな司馬遼太郎氏の「燃えよ剣」を読んだからです。小説の中で見つけた「日野宿」「石田村」「高幡不動尊」と聞き覚えのある地名が書かれているのを興奮して読んだ記憶があります。新選組ファンの多くがそうであること、私も新選組の足跡をたどる習癖が徐々に身につきました。彼等が実際に呼吸し、見、聞き、叫び、そして感じたその場面に自分も立ち、同じ空気を吸いたいと思いました。そして、彼等が何を思い、何を目指したのかを知りたいと考えたのです。「新選組好き」が高じて、趣味の会である「日野新選組同好会」を10年前に結成しました。13名の同志を募り、平成12年3月13日（朝廷から「新選組」と名乗るように武家伝奏を通じて連絡のあつた日）に、旧佐藤彦五郎邸（現在の日野宿本陣）で結成式を行いました。現在の隊士（公員）は約70名にも増えました。「日野新選組同好会」の設立目的は、新選組の歴史を語り

継ぎ、新選組に関わる他団体と広く情報交換し、親睦を図り、もって「新選組」の存在を後世に語り継いでいくこととし、新選組に関する勉強会、講演会、史跡見学会等を開催しています。また、パレードが好きな公員が日野市（ひの新選組まつり）はもちろん、函館（五稜郭祭）、板橋（滝野川新選組まつり）、会津（会津秋祭り）、そして長岡米百俵まつりなど、全国のパレードに参加しています。長岡市さんとは会津歴代藩侯行列を通じて知り合い、日野市に事務局を置く全国新選組サミットにも加盟していただいて交流しています。河井継之助記念館の稲川館長とも、新選組サミットINなおかの記念講演で先生の熱弁を拝聴して以来、ご指導・お付き合いをさせていただいています。数年来の目標だった、稲川先生を日野にお呼びしての講演会も昨年会場満員御礼で実施することもできました。最後に、河井継之助記念館は私が最も好きな人物記念館の一つです。「誠の心でまちおこし」をテーマとして地元の市議としても活動する私が、番好きな河井継之助のことには「民は国の本 吏は民の雇」です。峯岸弘行（みねぎしひろゆき）プロフィール昭和35年（1960）東京都生まれ。日野市議、日野新選組同好会顧問、新選組を語る会事務局長、第9回新選組サミット（平成16年）の開催や各地での新選組パレード出場など活動の幅は広い。新選組をはじめとする幕末志士へかける熱い想いは人倍である。

峠抄・とうげしょう ⑧

玄関前や歩道の「赤茶けた染み」を不思議に思われるのかよく訊ねられます。長岡は道路だけでなく一般家庭でも地下水を汲み上げて雪を消すための水を出しています。そのため街のいたる所でこの染みが見られるのです。

生活道の確保のための消雪用の水出しだけでなく夜明け前から除雪車も出動しています。道路の両脇は雪の壁が高く歩道の雪かきにも苦労します。日増しに厚くなる屋根の雪おろしの心配もしなければならず除雪作業は大変な労力を要します。今年は雪が降り続いたため大雪になり各地で大きな被害が出ました。

継之助の生きた時代は暖かい防寒着や長靴もなく、今のような除雪機械もない時代ですから全てが手仕事。身を切るような冷たさの中での過酷な作業を隣近所助け合つて乗り切っていたのではないのでしょうか。

白く閉ざされた雪の中に埋もれじつと春を待つ、そんな環境が長岡人の質朴剛健の気質を育んだのかも知れません。

（西川）

『峠』の越後長岡を歩く

⑦

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は東山山地の長岡と栃尾の境に位置する森立峠を歩いてみました。

●『峠』下巻 新潮文庫356ページより

退却行軍がはじまった。

「むしろ、このほうがいいのだ。と、継之助は退却行軍を指揮して森立峠をのぼりつつおもった。眼下に長岡城がみえる。お三階はすでになく、遠目にもくろぐろと焼けこげてみえる。」

最初の長岡落城の後、いったん悠久山に集まった継之助と長岡藩士たちは、奥にある東山を越え、長岡藩領である栃尾へと退却して行きます。その時通った峠が森立峠。「もつたてとうげ」と読みます。江戸時代の文書等には、「森立」の他に、「盛立」や「持立」といった表記も見られ、様々な書き方がされていたようです。江戸時代、長岡城下と栃尾郷を行き来する道はいくつかありました。が、なかでも森立峠を越える道は標高510メートルの険阻な山道であるにもかかわらず、最短距離の要道として領民によく利用されていました。また、この道は藩主が栃尾を巡視する際に殿様行列が通ったことから「殿様街道」と呼ばれていたそうです。

現在、森立峠と言われているのは、

バス路線工事の時に北寄りにくられた舗装道路の新道頂上付近になります。そこから上の八方台へ向かう道の途中が、継之助も通った旧道の森立峠であり、周辺には当時を偲ばせるものがいくつか点在しています。

まず、栃尾へと続く旧道手前にあるのが「見送り地蔵」(または「見送り地蔵」と呼ばれる石塔です。延命地蔵が線で刻まれており、江戸中期には存在したと言われています。そして、さらに八方台に向かって登っていくと、道沿いの斜面に「薬師清水」と呼ばれる清水があります。看板もなく、数個の苔むした石碑と、斜面からわずかに水が流れ出ているのを確認できるだけです。当時はそばに茶屋もあり、殿様もここで休息して清水の冷たい水を飲んだと言われています。

今では旧道は草に覆われ、新道もバス路線が廃止され、八方台にあった国民宿舎もなくなり、人通りがだいぶ少なくなった森立峠ですが、頂上付近から長岡のまちを一望でき



る見事な眺めは変わっていません。

継之助は西国遊歴中に書いた旅日記『塵壺』の中で、現在の福岡県にある冷水峠を越えた時のことをこう記しています。

「此辺之道二六険なれ共、我国之持手ヲ越て栃尾行二比すへきハアラす」

冷水峠はこの辺りにしては険しい峠だが、自国の持手(もて)「森立」峠の険しさほどではないと、遠い旅先でその険しささえも懐かしく思い出した故郷の峠。数年後、その場所から焼け落ちた城を目にすることになるとは、継之助はこの時想像すらしなかつたはずだ。(権澤)

※森立峠へ行く「県道9号長岡栃尾巻線」は、冬季は雪のため通行止めになります。

参考文献

- 『栃尾市史 上巻(栃尾市役所)』
- 『長岡 栃尾里山歩き(越の里山倶楽部)』
- 『角川日本地名大辞典(角川書店)』



栃尾へと続く旧道



見送り地蔵



薬師清水、よく見ると石碑が



頂上付近からの眺望、遥かに長岡市街が見渡せる

はるかに青山あり

人財と文武と富国 その一 ● パネル紹介



フエリーチェ・ベアトの幕末
中央に大きく写し出されている屋敷は越後長岡藩牧野家中屋敷である。標高二十六メートルの愛宕山からみた江戸東方風景の中に長岡藩邸が存在する。展示しているのはパノラマ写真の一部であるが、実際は五枚で構成されている。『復元・江戸情報地図』で全景を確認すると、右隣は大和小泉藩片桐家上屋敷、向こう隣は伊予松山藩松平家上屋敷、右手奥には徳川家菩提寺増上寺、遠方には浜御殿（現浜離宮）があることがわかる。中屋敷のある愛宕山と東海道に挟まれた一帯は愛宕下といわれ、別名・愛宕下大名小路とよばれていた。

● パネル紹介

江戸の大名屋敷というのは幕府から与えられた拝領屋敷であり、政策変更や人事異動に伴い屋敷は頻繁に移動した。長岡藩の上・下屋敷も藩主の幕府における役職により度々移ったが、珍しいことに愛宕下の中屋敷は同じ所に続したという。ちなみに中屋敷跡は東京都港区西新橋三丁目である。

写真の撮影者はイギリス領のクルフ島（現ギリシャ領）出身のフエリーチェ・ベアト。ベアトは報道写真家としてクリミア戦争などを取材後、一八六三年に来日し幕末から明治にかけて日本各地を回って撮影。そのうちの一枚に長岡藩中屋敷があり『F・ベアト写真集2 外国人カメラマンが撮った幕末日本』に掲載されている。もう一冊『F・



フエリーチェ・ベアト写真集

ベアト写真集1 幕末日本の風景と人びと」と合わせて見ると、まるで江戸時代にタイムスリップするかのようだ。実はこの写真、昨年放送されたTBS日曜劇場「JIN—仁—」の中で、オープニングのタイトルバックに写し出されていたのをご存じだろうか。

このパネルの見どころはまだまだある。「学問というものは、実行しなければ、何の役にも立たないものだ」「馬術は、駆けることと、止まることさえできれば足りる。きまりきった作法などは、必要ない」など継之助が遺した言葉、また彼を取り巻く人物相関図や、彼の影響を受けて活躍した人々の紹介、さらに西国遊歴に旅立つ前の人生において転機となった出来事—つまり陽明学との出会いやペリ—来航に対する藩主への建言及び宮路騒動の裁定など—を採り上げて説明している。挫折や葛藤、しかしそれを乗り越えるために行動しようとした強い精神力を感じる事ができ、現代に生きる私たちに勇気を与えてくれるおすすめのパネルである。（補保）

参考文献

- 『F・ベアト写真集1 幕末日本の風景と人びと』
- 『F・ベアト写真集2 外国人カメラマンが撮った幕末日本』横浜開港資料館編
- 『復元・江戸情報地図』朝日新聞社刊
- 『江戸切絵図散策』新人物往来社刊

遠方からの客人

● インタビューの継之助のイメージを膨らませ...



平成22年10月13日(水)

橋詰明仁さん (49歳)

高知県立坂本龍馬記念館でカルチャーサポーターとして活動している橋詰明仁さん来館！

記念館での活動を教えてください

— 龍馬さんが暗殺された近江屋コナーを担当しています。坂本龍馬を知る楽しさを伝えたい。そういう気持ちで基本としてお客様や子供達に話しています。

心に残るエピソードは

— 歴史に名を残した人の末裔の方が訪ねて来ることがあります。勝海舟さんや一橋慶喜さんの玄孫さん、龍馬さんが暗殺された近江屋の井口家の方とか。歴史に関わった人達の末裔の方と時間を共有している一人だと思つと感動します。

また「今日あなたの話を聴けてよかった」と笑顔で帰って頂くこと、感想を聞かせて下さい。コナーで「龍馬さんのことが理解できて大変楽しかった」と書き残して下さいお客様

がいて、それらが自分のエネルギーになっていきます。

これからやってみたくことは

— 龍馬さんが日本の夜明けを目指して土佐から脱藩するルートがあります。司馬遼太郎さんが『街道をゆく27 橋原街道』で書いた道を今流行の自転車旅する企画を温めています。乙女姉やんや親族に累が及ぶのではないかと考えながら心を奮い立たせた山道を歩くことで、不透明な現代に生きる私達の心の糧になるのではないかと思います。

『西の龍馬、東の継之助』

どう思いますか

— 志半ばで非業の死を遂げた点では共通するものがあると思います。龍馬さんにも戦争せずに新しい時代を築きたい思いがあり、継之助さんにも故郷を火の海にしたいくない思いがあった。二人とも同時代に生き、いかに幕末を收拾しているかと思ひ悩んだ姿勢に共感を覚えます。この記念館に来ることで継之助さんのイメージを膨らませ彼の思いを感じる事ができると思っています。

● 橋詰さんは自分達が楽しんで自分たち出来る「身の丈のボランティア」を心掛けていくとのこと。龍馬という人に惚れ込み、自身のコナーで龍馬を演じ、語るその眼は輝いていると感じました。インタビュー/伊佐

河井継之助はどういう人物？

その⑦ 呂坤の「呻吟語」

連載

明代の行政官で儒者であった呂坤の「呻吟語」を写しとったものが現存している。継之助自筆の「呻吟語鈔」である。呂坤は明の世宗の嘉靖十五年（一五三六）十月十日に生れ、神宗の万曆四十六年（一六一八）六月八日に八十三歳で没している。父は吏部文選司主事という下役人であったから、呂坤は学問で身を立て、出世を志している。

呂坤の呻吟語は六巻で構成されている。すなわち、巻一には性命・在心・倫理・談道の各篇。以下巻二修身・問学。巻三応務・養生、巻四天地・世運・聖賢・品藻。巻五治道。巻六人情・物理・応諭・詞章である。継之助の呻吟語鈔の目次には巻六の物理以下がないところを見ると被見しなかったか、筆写に値しないと判断したのであるうか。現存している筆写本は巻二の修身から入っているから、巻二を筆写した別本があったのであろう。

多くの令（県知事など）であったが、五十五歳のときには山西按察使となった。呂坤は「吏治の良なきは、未だ大吏より始まらざるものにあらず」といい、すべての政事に、自分に厳しくし、賄賂などを禁じている。呂坤は、あらゆる難事件を解決したというが、その際、孤立しても少しも動揺せず、自説をまげなかったとある。

継之助の後半生を考えると、この呂坤の生き方に、継之助の人生が似ているところが多い。たとえば、流亡する民を憂える呂坤が実態を知ろうとしている姿や国家財政の破綻の現状に於いて、如何なる施策をしようとしたかなどが記述が、写本の「呻吟語鈔」からうかがえる。

呂坤の呻吟語は六巻で構成されている。すなわち、巻一には性命・在心・倫理・談道の各篇。以下巻二修身・問学。巻三応務・養生、巻四天地・世運・聖賢・品藻。巻五治道。巻六人情・物理・応諭・詞章である。継之助の呻吟語鈔の目次には巻六の物理以下がないところを見ると被見しなかったか、筆写に値しないと判断したのであるうか。現存している筆写本は巻二の修身から入っているから、巻二を筆写した別本があったのであろう。

題箋題に「呻吟語鈔」。目次には「呻吟語目録、寧陵呂、坤叔簡甫著」と記されている。呂は姓、坤は名、字を叔簡、新吾と号すとある。新吾と号したのは、みずからを新たにしようという決意のあらわれであるという。旧幣を払拭し、新しいものを求める呂坤の心意気にも、継之助は共鳴できたのであろう。もとより、この呻吟語は、呂坤の代表的著作であり、彼の思想を表現したものである。呻吟語の表題にも、みずから、つぎのように述べ

ている。

「呻吟は病声なり。呻吟は病むの時の疾痛の語なり。病中の疾痛はただ病者のみ知る。他人ともに道ひ難し。また、ただ病む時のみ覚ゆ。すでに愈ゆればたちまちまた忘るるなり」と記している。呂坤は地方官僚を経験した政治家であるが、彼が三十数年来、執務や政治を行うにあつての苦悩を記録したものが「呻吟語」である。呂坤は自撰の墓誌銘に「質困鈍」であると謙遜しているが、これは生来、儒学で一番大切な暗誦ができなかつたという。つまり鈍才であつたという。記録には継之助が秀才であつたと記されていない。むしろ、儒学の基本である素読を嫌っていた。だから精読をし、筆写をし、よく解釈したのだと思われる。呂坤もそうだが、継之助も書を読んではしなかつた。むしろ、その意をくんで、趣旨を理解する法を採つたのである。その方が、実利実学だという。

呂坤は晩学大成をめざしている。郷試に合格したのは二十六歳。進士となつたのは三十六歳であつた。そして、三十九歳のとき、ようやく県令となつて山西省襄垣県の劇邑に赴いたが、そこは政治的に疲弊した問題の多いところであつた。自然災害が多く、経済的にも貧しい土地であつた。そこで呂坤は法をたて、作物を貯蔵し災害に備えた。学校をつくり、そのために田地を備えて多くの学生を集めた。そこで儒学を教えたのである。たちまち政治が民衆に理解されて、民衆同士あい争うこともなくなつたというのである。他の県令や裁判官となつても呂坤の権力や民衆におもねらない態度は高く評価された。呂坤の政治姿勢は「自分は何処に行つても正義を行う」というのである。そして官吏が民をよく治めるためにも、みずから厳しくし、賄賂を禁じた。継之助が郡奉行となつた際、厳しく賄賂を禁じたのも、呂坤の教えを守つたのであろうし、かつて筆写した呻吟語の二節を知つていたからである。

呂坤が五十七歳のとき、豊臣秀吉の朝鮮出兵があつた。このとき、呂坤は二節を守り、孤立しても動揺しなかつた官僚として評価されている。つまり、自国の独立を守つたのである。この後、都に上り、明国のために天子に上奏をし、地方民政の充実・国家財政の健全・国防衛体制の強化を説いている。その態度は皇帝に対しても直言し、誹謗のために信頼できる臣がいななことなどまで及んだ。そのため弾劾されることも多く、しばしば窮地に陥ることもあつた。致仕後、弟子をとり講学をして村夫子に

徹した人物である。継之助は呻吟語を六巻と記しているが、千七百九十六条と補六十九条をどのように読解していったのか興味深いところである。

継之助は独学といつていいほど、読書をした。それも、感得したいところは筆写した。その筆写本が伝わっているが、尋常なものではないことは一見すればわかる。それほど、筆勢に思いが込められている。そして不思議なことに一字も誤りがないのである。余程理解しえたのか、それとも文字の正鵠を期すために、原本を飽かず眺めたのち書き込んだか、何べんも書き直して、製本を写し終えたのかという疑問の残るものである。「呻吟語鈔」は、継之助の筆写本でも、一、二を争う貴重な資料である。それをよく読めば、継之助のめざした学問の真髄を知ることができるし、ろものでもある。継之助の思考の一端を担うものとしてひもといてもよい。たとえば問学に「悟とは吾が心なり、よく吾が心を見れば、すなわち、これ真の悟なり」とある。悟るといふテーマを見つめた継之助の苦悩が伝わってくるかのようである。また五十二に「学ぶ者の万病は、ただ箇の静の字、治め得」とある。志を立てて学問をしたのだが、なかなかうだつたあがらないみずからいいきかせているような箴言とい

弟子をとり講学をして村夫子に

弟子をとり講学をして村夫子に

える。

「応務六」には

「余、行年五十にして、五つの争はざるの味を悟り得たり。人これを問ふ。曰く、居積の人と富を争はず、進取の人と貴きを争はず。矜飾の人と名を争はず。簡傲の人と礼節を争はず。盛気の人と是非を争はず」と。

継之助は筆写した呂坤の人生観にみずから近づけようという気配が濃厚である。つまり居積とは財産を蓄えた人、富豪をいう。進取は勇氣のある功名者。矜飾は虚栄心で誇り飾りたてる人物。簡傲はおごり高ぶること、盛気は盛んな勢い、つまりえらい剣幕といい、そういう人たちと争わないことを五十歳になつて悟つたというのである。

養生の二に

「天地の間に人に禍するものは多きにしくはなし」

呻吟語の治道六十七に

「善く威を用ふる者は軽々しく怒らず。善く、恩を用ふる者は妄りに施さず」

「上に居るの患は、功なきを賞し、

罪あるを赦すよりも大なるはなく、咎は功あるを賞せずして罰、罪なきに及ぶよりも大なるはなし。この故に王者は、功罪に任じて喜怒に任ぜず、是非に任じて毀誉に任ぜず。天下の情を平かにして、その変を防ぐ所以なり。これ国家を有つ者の大戒なり」

民の上にあつて政りごとをするもの心配は、功績のない人を賞し、罪があるのを知らないで許してしまふことであり、このことよりはるかに大きなものはないと思われる。また、上に立つ者の過ちは功績がある人を賞しないで、罪のない人に罰を与えることよりも大きいものはないといえる。したがつて王者たるものは、功績があるか罪があるかは任せて、喜怒の感情に支配されないようにし、正しいか、間違ひかに任せて、人の悪口やほめ言葉にのせられないようにし、天下の真情を公平にみて、世の変化を防ぐものである。これが国家を治める者の大戒である、などと後年、継之助の人間性に大きな示唆を与えた条文が多い。(稲川)

「塵壺」を読む

⑦ 連載

津には都合三泊滞在している。江戸を発つてからこんなに長い逗留

は初めてであった。以前、江戸で継之助が斎藤拙堂の門人であったこと

とがあつた。入塾していた際、川島億二郎を介して、久敬舎古賀謹一郎の紹介状を持参して斎藤拙堂の門下となつた。しかし、何故か斎藤拙堂からの感化された事例が伝わつて来ないところから、その警咳に触れる機会が少なかつたのではないだろうか。津城下に至つて、初めて斎藤拙堂に直談ができる機会がめぐつてきたから、継之助自身大いに発奮したのであろうが、結果からいえば、老境の域に達していた斎藤拙堂には、やや失望したらしい。

継之助は六月二十二日終日、拙堂と丸の内の屋敷と山荘で語りあかした。隠居したばかりとはいへ、多忙な藩務と門人たちの講義を卒えたばかりの拙堂が、親切にも対応してくれた。しかし、旅日記「塵壺」には「色々の事、何れも大概覚えある故、他日記さん」とある。つまり、以前、門人の一人として講義を受けた内容以外の目新しいことはなにもなかつたから、日記のなかでは記さないといふのである。他日記さんは、よく思い出して良い事があつたら記しても良いという意味にもとれる。

山荘は全く立派で美しく若い女性が拙堂をかがいごとく世話してくれている。継之助が終生、学者を憎むのはこのあたりにあるのかもしれない。つまり、学問をして生業とするものの、卑しさを知るのである。特に陽明学を教え、種痘などを率先して行つた拙堂の見識は高いものであつたから、いっそう継之助には、師が卑しくみえたのであろう。

四方山話をして、終日過した。そのなかで紀州藩の改革や小浦惣内の話などだが、もしも参考になるような話題があつたなら、旅宿に帰つて記録をしたことであろう。なかでも郷士隊の編成は拙堂の自論だつた。「いまや農兵隊は大切だ」と拙堂は言い放ち、俸禄は新田開発後の収入をあてた。「先生ももうろくした」とは書かなかつたが、津にはそれ以上拙堂のところにはとどまらうとはしなかつた。だいたいの拙堂の見解は間違つていと思つた。陽明学者なら兵を捻出するために民からの調達はしなかつただろう。小細工の策だつた。もしも郷士に会わなかつたら、拙堂の策を見抜けなかつただろう。奇人の土井幾之助にも会つたが、師匠とは考えなかつたらしい。むしろ、宿で体験した不思議な出来事に継之助の眼は釘づけになつた。日記でも書くことが思つたところ、隣座敷にいた庄屋らしき者一人が継之助の居間にきて、話しかけてきた。

そのつぎに拙堂は継之助に対し、儒学の謹慎の二字を教えた。「予に談す」とあるが、むしろ「継之助には謙讓心がたらない」などと小言を言つたのだろう。謹慎とは相当きつい言葉を投げたものである。これには師礼もままならない。「先生相かわらず壮気あれども、少し老衰の様に覚ゆ」とは、せいじの継之助の皮肉であつたかもしれない。

継之助の風体は、およそ武士らしくない姿をしていて、よく飛脚と間違えられている。だから旅人が気安く話しかけもし、声をかけられてもいる。それよりも何より、継之助の好奇心の方が強かつた。庄屋体の者からは、「最近の藩庁のなされようはひどいものだ」「私どもがいままで許されていた酒造りや荏かす(荏の実から灯油を搾つたカス)に至るまで役所を設けて、その利をしほりとうとする」「このごろの政事は何でも利を求めすぎ、荏かすも藩から求めるよりも、町人の方から仕入れた方が安い。これでは田畑の肥料にもならない」継之助は庄屋ふうの男たちが、力をおびていることにも驚いた。その悪口をいう二人は随分人品もあつたと記している。拙堂は義を説き利を計る学者であつたはずである。それが藩政改革をすすめるあまりに利しかはかつていないかのような感があつた。二人の声は「何となく、そしる様に聞こゆ」とあり、落胆した継之助の心が記された。(稲川)

スキンヘッドに眼鏡、今にも技をかけてきそうなガッチリとした体格。相場さんとの出会いは衝撃的だった。「怖い人……?」とんでもない!びくりする程腰が低く柔和な人柄、しかも筋金入りの燕弁!美酒と歴史談義を楽しみ燕を訪れた。

「商人道」——己の信ずるままに

アイバ屋酒店 三代目店主 相場 純夫さん 四十五歳

JR 燕駅近くに相場さんが営む酒屋がある。手作りの木製看板に心が和らぐ。ハッピー姿に手拭いがトレードマークで、この日もお馴染みの格好で迎えてくれた。仕事の傍ら『だっちもね通信』を執筆し店



「だっちもね」とは新潟の方言で『どうしようもない、くだらない』の意。「亡くなった祖母がよく言っていたに頭に残っている。自分が商いさせてもらっているのも祖父母がこの店を造ってくれたからという感謝の気持ちを含めてつけたタイトル。もちろん好き勝手なことを書いているから気に障るとか、つまらないなんて言われても『だからだっちもねえ話なんだって』と言えりし(笑)」

商売下手でも

NHK大河ドラマ『新選組!』を見て歴史に夢中になり幕末に関する書籍を片っ端から読んでいた。そして継之助と出会った。「勝ち負けで人を判断していいのかということとを教えてください。『勝てば官軍』といわれるように歴史は勝者側から作られるのであって、敗者側の歴史はなかなか語られない」。

だっちもね通信

自分の生き方と重なる部分は?「よそが攘夷や脱藩といっているけど、継之助は藩の中にいて世の中を改革する理念を曲げなかつたでしょ。酒屋でいえばお客さんを飽きさせないためにもどんどん新

商品を勧めていったほうがいいのはわかるけど、うちではできない。商売下手といわれるけど信じた酒蔵の酒を最後まで貫きたい。だから継之助が俺の目標!」。

そんな強い精神をもつ相場さんも「二十代の頃は正直酒屋をやることに気乗りしていなかった」ところが三十歳の時「新潟関屋に住むある酒屋先輩との出会いがあつて雷に打たれたよ、『ビビビ』とね。昭和三十年代、今ほど新潟の酒が人気が無かつた時代から、当時では珍しかった品質重視の酒蔵と共に歩んできた酒屋先輩の壮絶な生き様を聞いた時『遊んでる場合じゃねえ!』って踏ん切りがついた。先輩あつてこそ今の私です」。

商人道と武士道と

記念館で様々な人に会うが二様に司馬さんの『峠』を読んでる。相場さんもまた『峠』で人物を知り、急ぎ終焉の地を訪れた。「塩沢の自然は当時とそう変わってないだろうと思つた。継之助に詳しい地元の方を紹介してもらい二度ほど訪ねた。時代のうねりの中に命を捧げた者たちの存在を知れば知るほど今の政治家に憤りを感じるといふ相場さん。『峠』に『武士は雨でも軒下を歩かない』というくだりがあるが背筋を伸ばし凛として生きた武士の姿を象徴する一節。

しかも幕末は生きるか死ぬかという瀬戸際で必死に生きていた。今こそ彼らの生き方に学ぶ時」。東も西も日本を救いたいという思いは同じ。「長州ならば高杉晋作の行動力がすごい!龍馬ほどメジャーでないとこがまた渋い!日本が植民地にならずに済んだのはあの人のおかげといわれているが真実であれば救世主。龍馬の方がメジャー!」

ただど俺は断然:継之助だ!天邪鬼でしょ。酒も有名銘柄ばかり扱っているわけでもなし(笑)」

野球少年であつた相場さんは大人になつて武士道に憧れ、もう一度少年時代に戻れるなら剣道や柔道をしたそう。「でも今俺は商人だから『商人道』。変人こき(新潟の方言で「変わった人」の意)といわれようと、大切な人のために信じるものを無我夢中にやっていきたい」信念を持ち続け合しな生き方は簡単なようで難しい。帰りの電車に乗り合わせた高校生に、振る舞いや日本語の乱れが気になった。君たちが日本を背負う大人になるのかと老婆心ながら憂う筆者であつた。

(インタビューと写真:嘉瀬)

相場純夫 あいばすむおプロフィール

昭和40年新潟県燕市生まれ。十代の頃から大阪や名古屋で修業に励み、22歳で帰郷し家業である酒屋を継ぐ。『三ッ丁』として『だっちもね通信』を隔月発行。河井継之助や歴史にまつわる題材も多い。目下の趣味は愛鳥と海辺での読書。

蒼龍の遺徳を偲んで…

河井継之助没後百四十二年祭法要

河井継之助没後百四十二年祭法要が、新暦の命日十月二日にあわせ直近の日曜日である十月三日に菩提寺の栄涼寺にて当会の主催で営まれた。住職の特別の計らいにより寺院が所有する継之助の肖像画が掲げられ、季節外れではあるが継之助が旅日記「塵壺」で記述した蜜柑が供えられた。法要には八代目河井弘安さんが母の恵美さんと共に参列し、市内及び県外の会員も多数出席した。



遺族を代表し墓前に手を合わせる河井恵美氏と弘安氏

茶会

河井家遺族を代表し河井恵美さんは「市民の方から法要をしていただけるのはありがたい。これから愛される人物であることを願っています」と述べた。法要の後墓前に参拝し参会者全員で線香をあげ

継之助を偲んだ。同日、記念館ではボランティアガイドの会主催で茶会が催された。一服の茶がとりもつ縁で「美味しいお茶ですね」と言葉交わす方々。継之助も佇んだであろう庭で、秋晴れのもと野点を楽しんでいた。(伊佐)

会員の声

「会員の声」大募集!

●海外より長岡に思いをはせる

温厚で辛抱強かった亡き祖母は長岡藩士の末裔でした。当時幼かった曾祖父が手を引かれて会津へ逃げた話、戦後没落して苦勞した話、河井継之助という立派な家老がいたという話を、私が子供の頃によく聞いてきました。現在私は海外暮らしですが、先づ先祖の墓を訪れていなかった所、先日20年ぶりに長岡に行き、栄涼寺の先祖の墓参りをし、記念館にも訪れました。不便の多い発展途上国で

の生活の中、先人たちに習い日々頑張っていたいです。

●菅原由美子(パオ共和国) 河井継之助が今も語りかける

生きる意味を考えあぐね、司馬先生の主人公がかけまわる小説にどっぷり感情移入をしていた若かりし日々。そこに私の前にあらわれた強烈な個性は、心の中に深く入り込んできて、いろんな疑問を峠という本を通して答えてくれたのである。河井継之助が人生の面白さを語りかけてくれる。

徳川家の危機にひんして「武士はこの一日の為に禄を頂いている。男子はそういう一日を感じられる者言うのだ。今もその一日の為に一日を送りたい。」
— 畑中完仁(京都府城陽市)

●越の旅

どう生きるべきか、悩んでいる時、NHKで「花神」を見てから、司馬作品を読む様になり、「峠」で河井継之助を知りました。武士として恥ずかしくなき様生きた、継之助に感動し、一度、彼を育てた長岡の空気を吸いたく20年近く思っていました。桜の葉を交わすことが出来ました。桜飯の美味さ、慈眼寺での悔しさ、朝日山の豪さ、終焉の地の静けさ、お墓の悲しさ等思い出がいっぱい出来ました。市観光課の大関さん、お世話になりました。

●河井継之助への想い

— 渡辺博文(愛知県高浜市)

明治維新の勉強を始めて二十余年、京都、会津、只見、長岡を何度となく訪ね歩いて私なりの河井継之助像は、広く見聞きし自ら行動を起し結果を見るに徹する人物だったと思います。記念館に入ると正面向って左側に展示してあるパネルに「一寸の虫にも五分の魂、見せてやろうじやないか」この言葉に私は非常に共鳴しています。どんな人間でも一人々考えかたは違つし、言葉に出さなければ人には伝わらないと言ふ事、ただ人に右ならいしていいものではない事をこの言葉に重ね合せています。最後に稲川館長の十数年来のファンです。いつまでも元気で記念館の発展に御尽力ください。

— 池田鈴江(新潟市)

●「峠」を読み「只見町」を想う

河井継之助記念館友の会々員で只見町に行った折、歴史上余り知らない事実を稲川先生より教わり、只見町民の優しさ、文化造形へ深き想いに感銘す。(長岡市にある中央病院に勤務の新冠先生も只見町出身。峠を読み、説明員の方の話しを聞き、また峰村先生作の銅像から継之助の想が伝わってきます。人生で困難の時、目の前の「峠」をなんとか乗り越えれば思わぬほど良く転回する。それには誠信、誠意、誠実、峠を読み深く想う。混沌の時代、作家司馬遼太郎先生思想を記念館で共感出来ありがたいことです。— 山田一男(長岡市)

●酒の友 河井継之助

二十代の頃「峠」を通じ河井継之助を知った。とても眩しく思えた。それは彼の「生き様」に強く惹かれたからである。私はいまでも悩みがある時継之助を想う。地元下呂温泉の居酒屋数件に「継之助」のネームタグを着けたボトルをキープしている。一人で飲む時河井継之助を想うにちよつとよい。友の会の末席に入

れて頂いて丸一年。長岡再訪は難しいが皆様と共に継之助を少しでも共有したいと願っています。最後に会員の皆様、下呂温泉お出かけの節は是非「ボトル」を探して下さい。

— 中島達也(岐阜県下呂市)

●河井継之助の苦境

戊辰戦争の時、長岡藩が力説する「武装中立国」の実現に努力する河井継之助の立場は後世の歴史に残る同情すべき事件であります。就中小千谷談判の西軍(薩長)の軍監岩村精一郎との対談に至っては痛恨の極みと言わざるを得ません。後年山本五十六がこの先人の願いをもつてロンドン軍縮会議に臨んだと聞いております。今日の「普天間」問題も歴然とした日米間の交渉、外交問題であります。性急な期限にこだわることなく根気強く納得の行く解決策に努力すべきであると思ひます。

「会員の声」大募集!

— 三條和男(東京都武蔵村山市)
原稿は二百字以内(題名、氏名は字数外)、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしております。

●記念館オリジナルポストカード販売中!
(5枚組、パッケージ付300円) 郵送も承ります。

おしらせばん

●平成23年度
総会・講演会・懇親会のご案内
日時：4月23日(土)午後2時から
会場：会館青善
【参加申し込みが必要です(会員優先、定員200名)】
・第1部：総会／午後2時～2時30分
※受付午後1時30分～
・第2部：講演会／午後2時45分～4時15分
定員先着200名
・第3部：懇親会／午後4時30分～
※詳細はご案内をご覧ください。

各種講座実施中! お気軽に
お問合せください!

12月27日は河井継之助が江戸遊学に旅立った日です
「開館4周年記念講演会『河井継之助と国際法』開催！」

評論家・麗澤大学教授 松本健一氏



松本健一さんによる講演風景

心配していた雪も夜には小降りになり、会場は県内外から訪れた四百名近い来場者で埋め尽くされた。講演を務めた松本氏は北一輝の研究で一九七〇年から何度も来県していたが、以前から関心のあった河井継之助の生誕地をみたいと長岡に立ち寄ったのを機に、継之助のライバルともいえる小林虎三郎を知り、二人に関連する資料などに触れるきっかけになったそうだ。

講演の焦点は「河井継之助は『万国公法』を読んでいたろう」ということだった。万国公法は国際法としてウェイトンという人物がこれを著し中国で出版した。日本では幕府が百部出版し勝海舟も自費で百部出版した。長岡市立阪之上小学校には万国公法が現存している。外国と通商や通信をするためには万国で公に決めた法律、すなわち国際法が必要になる。これからは法によつて国と国の争いを裁いていく時代になる。「幕府から藩に送られた万国公法を継之助が読み、その先進的な考え方をいち早く取り入れたのでは」と松本氏は推察する。長岡藩の立ち位置を表す言葉として『局外中立』がある。「参戦せず兵も金も出さないと宣言し、局外にあつて中立の立場をとるということ」である。ご存知の通り坂本龍馬は万国公法を所有し、国際法がどういふものか早い段階で知っていた。しかし多くの者が万国公法を知らなかった。「慈眼寺で継之助が交渉に臨んだ西軍軍監岩村精一郎は陸援隊であつた。もし彼が海援隊に勤めていたなら、また山縣有朋クラスの人であつたならこの法を知っていたかもしれない」結局、岩村軍監との交渉は決裂し長岡藩は戦争へと突き進むことになる。「継之助は俺は侍として死んでいくんだとロマン主義的な最期を選んだ。幕末の抗いようのない時代のうねりにのみ込まれ、最後は侍として忠義の道を選んだ」と松本氏は語る。戦後壊滅状態に陥つた長岡藩が不死鳥のように蘇えることができたのは何故か。「長岡藩が

二つの中心を持つ『楳田』を構成し安定を保つていたからである。二つの中心とは河井継之助と小林虎三郎である。互いに反発しながら緊張を保ち屹立していた。戦争で河井継之助という指導者を失つた長岡は小林虎三郎という人物を円の中心に置いたことで、多くの戦死者を出し焦土と化した町を復興へと導くことができた」としめくくつた。

実際には万国公法や自身の著書『維

新新たなたり』三島由紀夫と司馬

遼太郎』を引用しながらの解説に、

来場者から「当時の情勢や長岡藩

の立場など初めて知る内容も多か

つた」との声もあがついた。(西川)

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数／正会員：523名／協賛会員：67名 (2/28現在)

会員募集中

●特典／①友の会会報「峠」配付
 ②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

●入会手続き
 ①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
 ②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで
 ①正会員(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円
 ②協賛会員／一口5千円(法人の他、個人でも可)

●口座について
 ・加入者名／河井継之助記念館友の会
 ・口座番号／郵便局 00560—9—96432
 長岡信用金庫関東町支店 普1032829
 北越銀行本店 普1764663
 大光銀行本店 普3011256
 第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

新入会員ご紹介

(平成22年9月26日～平成23年2月28日現在)

蔵沢 一正	山梨県笛吹市	建福寺	福島県会津若松市	増田 善一	千葉県千葉市
池田 鈴江	新潟県新潟市	佐々木 繁	茨城県取手市	横井 清	大阪府貝塚市
恩田 富太	新潟県長岡市	高橋 明	新潟県見附市	渡辺 貴広	宮城県仙台市
金子 京子	埼玉県さいたま市	高橋喜一郎	新潟県見附市	渡辺 博文	愛知県高浜市

以上12名(アイウエオ順・敬称略)

●友の会事務局／河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

編集後記

●継之助との出会いは小学生の頃でした。先日懐かしい再会が：当時私たちが六年二組が学級制作した紙芝居「河井継之助物語」を持って担任だった先生が訪ねてきてくれたのです。「朗読が上手だからリーダーとおすがの役を」と言われ大役をもらえたことが子供心に嬉しかったのを思い出します。

勉強ができず先生を困らせてばかりでしたが、大人になってちよつとは恩返しできたかな？今年が開館五周年を迎えます。遠方の会員の皆様にもご満足していただけるよう、新たな気持ちで新年度をスタートします。(嘉瀬)



紙芝居「河井継之助物語」

編集人・稲川明雄 嘉瀬宏美 榊澤幸子
 構成・月刊マイスキップ編集部
 伊佐春美 神保留子 西川里美
 印刷・高速印刷株式会社